彩を見せ江戸名女達七夕已後他人ふまじきを女子計付歯黒あり
消ゝ赤面をうる之消磨の江戸近へ赤んめう稼元りきを出てあり
しふ冥治の江戸中止む大火ゆ已後ふくめんの上ふ白ぶちと
いふ黛をうむり白粉ぶち所も白ぶち寛文乃
江ふ松坂といふ黛処宝の江ふ熊谷黛ともそうもあり人分あり
黛ぶち乃又天和の江戸貞享の江戸より編黛上ぶる黛下ぶる黛
上下ぶふ黛黛ふ成る云く○大火ゆ後別小分の人ふ侍屋上下ともふ
上下ゆ又ゆ稽計ふして殺ゆを元て歩ゆ出る人もあり又ふ拵の
二尺ゆ多拵ゆて鞘出拵しける人もあり中間ゆ一寸あるふもゆ拵
して帯る云く　前くあるゆふ江戸世の風俗雑事ふ〳〵
記りを年下引して世人の知るふ也畧江
○稲毛藩中九子村羽黒権現ふ天正中の勧請なりゆ義恵の江戸夏ゆ今浅のけ

小平二郎と云人中のゆゆ中風を煩ひ居あて江戸歩行ゆ出ゆ歯黒ゆて云浅分ふ江戸
中ゆ北人ゆ成この所ふ来りしゆ白社を初りてふ豆腐の異説を江戸ゆ歯豆腐ゆ
江戸歩行ゆ自来ゆ成ゆて白社ゆ来住して帯義を勧り又消人（祈祷ゆ）ゆ江戸ゆ
江戸異を在の法人系消祈祭江戸ゆ戦しゆりしふ此歯三年江戸大火の後自
絶ゆりしゆて○兼題二年刊行の江戸図ふ載る今小柳町の所ゆ
戯草法門内ゆ喰町の辺ふ雲光院弥勒ゆ所今ゆ名ゆ今ゆ
連ゆ浦安ゆ出ゆ云ゆ所数ゆ日輪ゆ知ゆ江戸川の今云
新しゆ橋を江戸ゆ橋ゆ大火後橋ゆ記り日本橋西河岸
ゆり南橋町近の町屋の門後源左衛門（吳服橋ゆ）迄家玄宅沙菴南
ゆ屋おひこセイフン玄琳派治橋ゆ小ふゆのゆうぐん通一丁目ゆ
ゆ迄ゆ同二丁目ゆ例ゆ中ゆ弓町裏ゆ江戸ゆ中ゆいづも町ゆ裏
今春七郎ゆ云ゆ中ゆ小を八ゆ町又佃川町の小ふも八ゆ町有山玉
法猿所今の辺ふあり浦猟橋辺ゆ南八丁堀ゆ迄ゆ流（寛永の頃ゆ有）

教字あり〜〜の塔〜〜移りて今浅草大猷寺に移る

明暦元年　乙未　十二月十二日改元

梅屋句集に年号改元の記事

此暦や梅のあ〜〜ちらひ〜〜るか

とよむあり改元に月あり

○下谷広徳寺に剣潤山聚蚤和尚　和尚は寛文元年廿十月弱日寂八十歳翌年大円宝鑑国師と諡号をあたる

○玉川上水今年より金〜流れ出せり中渋田川芸に出

○市谷正安寺月桂寺と称ず○六月廿五日於本所二人辻斬　称之吉支号石原左人流派法板七人辻斬

○十一月十二日医師板坂卜斎　名如春流派は中一医生流に系統を林氏名撰述一稗に修芸流あり卜斎は流派の利協流人に伝しむこれを流派文庫という

○十一月朝鮮人来聘　正使翠屏裴碩斡副使秋潭鍾陽泛事書記竜翼旅宿本所横川光山寺滞在の辺に文庫を建て浮の書籍を収め同じく流派の法下中記あり此門に大なる土蔵を造りて内に和漢の出板万巻を

の法下中記あり

紛へらる世に流派文庫と称しるといへり

同二年　丙申　二月定

○正月廿二日夜赤雲西に出る○正月朔日より四日の夜雷鳴

て雪霰の降へ出びたるるの若しかまくらと合せ〜〜

○浅草寺山門の仁王尊を奪ふて世に云ふ〜〜尊流行

年来七○六月赤雲西方に出る年の如く出ること二年あり

○六月二日より観世美勇延命寺　弁田橋本田戸の裏○浅草に於て狂流

舞を建○十月九日吉原町を改め　浅草代地として新吉原と二百

坪の地を日本堤の辺　千束の内田地あり　ふて下さるを引料として今吉原の

小名割十ヵ所云　下さるを有命せらる○十月十六日夜吉原町より出火小風

強く中橋南鞭治町桜町辺焼

○十二月十六日茶人今森雲孤没す　公長逝号宗和

明暦二年　丁酉

正月九日谷竹町火事　同日赤坂町火事　五日吉祥寺辺中石町
より出火　○正月十八日乾大風未刻より申刻まで大火
湯島神田迄浅草御門内町屋通町筋猿楽河岸橋八丁堀
迄焼亡　翌廿九日巳刻より石川伝兵衛
新鋳銭通町より焼出し　牛込市つ田安市つ神田橋市つ常盤橋市つ門
長崎橋市つ八代洲河岸大名小路焼亡　又同日昼
町（麹町）より出て半蔵市つの外桜田鹿市つ紀宗下屋敷門
前（つづき）
新札の辻海手まで焼亡　此夜焼死五千余人　同日
七百七十隊宇佐一組屋敷数を焼失　往来昼夜不絶宇町屋

百町行町八百町焼死人十万七千余人　宇佐一
二町　宇佐の地をのぞき非人をして死骸を船に乗て運しめ塚に築て
ちゃ院なを建て　亡骸を山に埋む　因向院と名つけ　（去年十月より
翌年二月迄）
なを五重塔一廿一日ふ出て大雪降　米價一斗
十五匁揚て　貧民の困苦も　一入路も難渋
正月廿二日より七日の夜火災ふ
重て　飢饉（きえん）ふ　所〳〵ふ於て　粥（かゆ）をのそりて　町中に　浪子
乞方　（合ふ一千六百余人に　二万六千八百六拾人）
乞方　因獄の罪人を出すの附
なるふこの時より始まる
くむ　あぶく
ケ月元〳〵より

視聞集　江府四隅の復仮ふ小屋をたつて人をむを入て

〳〵ひとしきいとむ法のふの　小屋
昆陽
正月下旬吉原町小屋掛を命せらる　事師令考ふこの時一見在市の内今の浅草
ちの西ち民荒地ふ年一面ふ移る中方
六月今の地に引うつり新吉原町と号し八月より商賣をはじむ

明暦三年四月浅草の江戸絵図の内えがき所江戸十二町すじ二町余町筋町の名あり
揚屋町の名あり　是はえがき所二丁目の地を今の地名そのまゝ別掌ふして代地をあたゝ
へ有すじ町の向かゝあるゝ所ふ町をひゝきさきたるこゝ町の中ふ二軒三軒あり
揚屋を一つふあつめて揚屋町と名つけ　とりえ地の辺にまより言稲町紀伊
町新堀町なゞ宿の名目なと　○正月廿二日羅山先生卒　七十九才　横墓谷長の
ふよりめて紀町名ふ改ると云く　列業ふ生ずを孫十一人
の災後年迄
山伏町ふ移る　○大火の後江戸中町家瓦葺を極ふせらる

此年間記事

東本願寺の井田明祥の下加賀屋敷と唱へる地の為ふ有り　大火の後
中濱本今の地へ移さる　大火の後　東本願寺今加賀屋と唱へる地と本願
祀後廣の出井紀尾房町の西ふ田徳市廣の出屋敷あり　是亦此辺
皆武家屋敷なり　○武蔵国　此度の大火の
○武蔵国　此度の大火の　災後の事をいへる俗ふ白紙町
とり柳原と町屋一番りのけられ　二丁　江戸人ふ石を以て東西十町

あるり小土手を築せらる日本橋の南茅町とり江戸市近の町屋を
元りの所ふ移さる小川橋ハ　そのそ心をうけ東西武町ふ移さ
上らるる又日本橋とり京橋まで八町の間ふ町屋二ヶ所を元のけて
命る所二十ヶ所ひろくあまり是ハ町屋焼りふせきゆひ拙人いやう
上ヶ人迄ハ也ハ釈ハ火をかゝ一人をとゝ事の後くふなふ
四人土手を築さらハ江戸井のものいう流言ありとも退ぞくやとた
ぬるこの出てもありと云く
○火災の為まて日本橋通江戸ゆ北の例細き道を五橋町（でうんちやう）といふ此所ふ
墓石（ぼせき）を作る立居さるゆへなり
○災後茅場町ふ茅商売の為ふ本橋四へ移さるとき後元禄
始の江戸井所江戸日へ移さるとて本所茅場町といふ

○此時武家の屋鋪移轉多し、又寺院も所替あまた有、吉祥寺は水道橋より駒込へ移る（水道橋旧名吉祥寺橋といへり同寺表門の跡なりといへり、寛文より元禄頃迄の江戸図にも吉祥寺橋とあるを）霊山寺は深空寺法禅寺以前は湯島に在りしを大火後浅草へ、川端(?)瑞林寺は同所より谷中へ移る、報恩寺は八丁堀より浅草へ、幡随院日輪寺（今の小柳町辺）神田より浅草へ、雲光院天嶽院あさ草誓願寺（今の兵女橋の西之）は清門内より浅草今の地へ移る

○此時代今の如き茶食を商人の類もなかりし、明暦災後今の金龍山乃門前に始て茶飯豆腐汁煮染大豆等をとゝのへて奈良茶と名付て出せしを、江戸中端々より金龍山の奈良茶喰ひに出るとて殊の外珍しき事に興しけるとあり

○浅草見附前丹後屋勘兵衛と云者、前後利(?)茶(?)店を出して始て

猪牙船を製して山谷通ひの客に是を貸す事を業とす、是に乗りて通ひしも有りしとあり（奇語考等に此頃の草紙に委し、ちよきとて柳橋あたりより漕出るなり、もるの日のごと）くるゝのごとく(?)もびとろの事あり、黄金も一つあそぬくまひありし

○柴垣といふ小唄流行る（還魂紙料に有り、此比柴垣をうたひ山へのさけの）

○明暦比年山岸安斎の遠遊紀行に給ふ霧箱昔よりつたへありし事を諸ばなしを以人論ぬまこと有り兼題の所までもありしとかや

○筝曲柳川検校八橋検校行る（八橋八重之丈の末に見えたり）

○明暦二年の江戸図大坂町（今大傳馬町一丁目）うらにあら町(?)ひの町（今小舟町二丁目辺）ありまた吉田流堀町の濱年寄番文とあり

万治元年　戊戌　十二月閏　七月廿三日改元

正月元日夜、市谷安養寺にて二世秀誉の夢に白衣の老翁現はれ和哥を詠し、日蝕ありてそれより稲荷社を建立ありし

ちり炎焔著しく江戸城あやふかりしかり

○正月十日牛込ちかちり出火引続き江戸中大半焼亡　城郭本丸

○二月本郷町海蔵寺坂小日向築地築地の内この山を小日向築地の内と築土の西と

引田を切地形をあらしけるといふ　正月十五日将軍豊川信政薨　五十二歳　外記

○六月九日稲荷森の順死　中村勘三郎　ぐえ組あり　○夏二回の地震あり　慶長以別

荒の地をあらためる所地八浜辺堀ら老形ふ組し高潮なり別堀塚と

称るも生ずく松樹を植ずく遠堀を標せり　寛文十二年夏弘文院城　密之先田宅の記を飛る

○狂云師鬼貫氏寛永中死ぬの狂言を業とし後通世して

道仲と号し橋場紙屋ち隠ら沈の辺に住て二の種を蒔く

ち弘ふ年堂再建の願を記し又沈の井手に矢丈天の小祠を

建ちり今年七月廿七日七十歳を終ちり　湘房宿屋　外記

○八月江戸中繁結株一町ふきケ所ツ八百八株ふ当る株ふ江戸町

数八百八町ありし事此時代の事ふ　寛永のあらためも八百八町のすを記せり　今八千六百余町ふ

及ちり○今年日本橋吉祥院　○九月十三日唐僧隠元禅師

接及善門ちり江府ふ来られ一附湯島麟祥院ふ七十余日逗

留あり実検弾集氏　この時歳六十九と云　○深川海福寺宴剣　屋山張元禄作

○同浄名寺宴剣　屋山日義上人　○日暮里経寺宴剣

○吉山清閑寺義江戸ふ遊秋為来ふ遠遊紀行あり

○今戸村百姓九郎右ゑ門男九郎助畑中のそふふ一稲荷の社を

吉原ふ移し是を九郎助稲荷のといふ　○九月明の宴師国性爺

鄭成功本邦へ援兵を請ふ　名八芝船又森信といふ今年三十九歳　日本の寛文六年ふ当る

○東海乃名不記成　民井子之作　寛文中板刻

万治二年　己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百五度ばかり出人安堵ところ
あり〳〵しと也　（世説裏ふ正月十二日廿日江戸大火とあり）○日本橋を掛替らる　（或年代記の橋を立しと
ばかりて句標撰定稿ふ第一といふ云いうあるべん寛永の頃づまめぐり
の墓ふもぎやうしゅあり此と紀児玉彦次といふ人なりと好るといふ）
○二月山崎宮祭礼再江戸へ遊八月帰京再遊紀行あり
○正月廿一日永田の坂山王権現社今の
地に造営今日に遷宮あり　（舊地は坂ばかりにて表根岸の辺麻布より
の墓あるべし表面の石松平豆州屋敷内麻布表
あるべしを見て浮世地と云ふ一説くり見の時表城
あて日本へ来る　（彗星あり此の事安倍の章の年山
紀行ふ見て稗説のこれを載て詳なり）
○七月二日大風雨洪あり　（俗年代記二倍ふ不浸る
とうてみ天下と称とるといふ）
○九月深川元淡法師妖を説ける沙ふ江戸へ出る

紀行ふ見て処紀行と云ふ
万治二年

九月九日江戸へまうでる上人給はりて法華経を誦して江戸へ
帰きぬたそうまふ日本橋のりくふつく二階ある所ふ月を見て

日本橋邊日本秋　更無一事掛心頭　今宵新見江城月

影満扶桑六十州

（せたき不ふ並居てつまづくある法ケ唐のやまとの又ところ人ふ月つくたや
歳日ふ月ふ月ん或ハ行脚しを見ん寺よみてんをやうこもあり毋ハ六日の月
さようそこの波ふのゝ居ゆつまき井の金ふ月ふ見ひるこもちしてうろめて
寄る附ふ一武附行脚ふとも旅宿の月といふをよまんとそよめる）

ふさこまのくまもあ死部も旅こころも神のゝ墨ゆるむさしの月

う死ふ行ふ猪ひるまふ一ふ墨桜沙ふ桜を見武蔵野へつき

月もまさしとゆるひるまをせすゝ国川旅とひ一き桜ふの猪見ケ

○ケ谷永昌ふ不ケ谷長者　（長者町ハ長者屋敷居の所ゝ云）の墓ふてあり上光院板ふ墓

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり年号ふ一けまハ銀一

けをとこ長五郎の子孫なりしの墓あり

○神田川堀割の事偽説説〻（今年せしを今年は普請始る説あり）

なりしを大川より柳原通り西茶の木下迄引通し新堀と名付る

外迄なりしを新堀と唱へ来りて大川へ通ずと云る（此掘土を以小石川小日向ふ築地おなり）

東武鑑に成瀬氏の八赤城説神下より同白ふ動迄田畑あり江戸川小石川へ接てあり飯田町下の堀と云ハ江戸川の堀田なり〻〻

○今年より本所深川浅草海辺地を築立ひきけを堀橋

をなしてこれ武家屋敷なり出来なりしなり後天和二年回向院と今の

浅草寺（あさくさてら）裏の通り町屋対陸なりしを亦本所の武士地町屋へ入り

て元の田畑となり元禄元年又昔の如く武士地町屋となる

○十二月霊巌寺深川へ移る（此地者一円寺寺院中社のこと）

今の町名なり　○十二月五日吉原二浦屋の名妓（めいぎ）高尾死転（てんよう）参（さん）の伝説（でんせつ）と云

山谷春雲院小墓あり又同西方ちかもありて方法三年とあるハ誤なり（辻世　さ和風ふるい）

ちかもうる記録なり　長さ五尺後ろ高六尺あり山本菊の辛夷塚考ふるに考あり又柳亭翁

のこる庭考一冊あり　○今年より江戸町〻新名多く出来る

末様子上せし

万治三年　庚子

正月十日大火宵〻より翌朝迄焼死者多し

○寺社奉行交命院七面宮再建○本所回向院建立成（此時丁酉焼死十万七千余人の死骸を葬り

一宇を創しめ法華経を唱へ塚上に洞像の観音を造り安置

し又山門を建る事ち二世住職となりこの山門元禄の火災に焼残り今迄一間斗り

此時代のこの辺をも本所と云り

○両国橋始て掛る（幅四間長九十六間始て大橋と唱ふ後に大橋と唱ふ）

始り貢文元年に成就せしとも云ふ屋貢とも云ふ

なく流れ出て新橋せし小川村酒屋今の西を見立て云上一掛けそなりしと云方

流失の事

かしこあり

題両国橋

杜梁新建枕長流　人是陸行吾在舟　疑似猛竜横卧勢　鷲峯先生

總州為尾武為頭、

○本横町五丁目ニ森田を形ち作て芝居真行ス（後代く劇ハと号ス）

○五月霖雨かろ○九月廿五日ハ羽黒所ニ世大橋ニ木柱ニ（二本板上行ちハ羽黒弱形の源を花せるなり）

を立○むさしあぶみ二巻梓行（後藤大夫の子を花せるなり　ハ出雲の流れとかいつり）

此年間記事

上野ニ金銅二丈三尺仏の大仏の像彫刻ス方治の比ハ食淫雲再燃也

ちなハ清流院元禄ニ

いろ年号を建のハ

○芝ハ日比谷稲荷社勧請

○大久保法号ス七面宮勧請○明人陳元贇渡国の乱を避ムて

本邦ニ来り江戸三田春町永井山ニ居ル偶居ル所浪人

後藤七郎左衛門貞次ハ浪人を

捕ハる術あり死ス校を見んるハ方ハ方ハ方ハ方ハ二人ハ術を学ム

元贇を工夫ス紀倒流柔術の始ム（元禄ハ寛文十一年六月九日八十五才ニ卒して尾張ニ移ル紀倒流柔術後藤氏より田長ニ来ル伝ハ金三郎ハ安平の人ハ子ハ門人千ハ人ハ及ハ人ハ）

○方治の比後藤氏の新川の辺ハ酒樂ハ行る者ハ比ハ江戸ハ人の

駆ハ紙帳の内ハ入ハ以ハ八人の後を殺ハ人ハ一代安ハ行る

芝ハ紙ハ入ハ八人ハ人の後をハ殺ハ人ハ

寛文元年　辛丑　八月閏　正月廿五日改元

正月十九日の夜光物ハ出ハ町ハ行ハ一天

豆のハ

○正月廿七日ハ通町ハ出火大火の辺飛火ハ橋京橋の辺

本横町まて家方町屋焼ハ焼亡○勅進相撲今年ハ毎年

続ハ奥ハ

○二月ハ伊勢宗廣ハ男女ハ出ハ事ハ

○三月十二日林濱斜斎卒（三十八才名ハ信号ハ函三子　藤樹ハ号ハ）

○二月年号改りし時
　　るあるこいろはとたねんうしの文和もたねうこうぶんぶうこうねん
辛酉考不審川を角う文
来歴のすさひあるべし
○六月今度小石川通新橋架木人改法蕃西深川に不逮橋不津川
に年稲さる○秋五十年来の豊作と云
○八月二ッ谷傾城屋不絶くあり不安の事を作ること
○十月廿八日江戸大火あり此時浅草西鳥居あり
○十一月二日浅草橋田某屋藩内信濃守より火を迎武家の流
焼亡

寛文二年　壬寅

新く松師今年より七日不死掃　長三六十六日之○正月中旬奴りの面鬱表

愛長用ゆまゝく又る者多不安り此行きるを得ぬひ又尊屋町の
河岸不年一つ猿楽屋ろせんちやくいりのを得ることる
○正月廿八日元祖吉等り作年　九十一才吉等賞賜の家あり平次氏
あじろ代く吉等を以て氏
○三月廿二日年刻大地震○五月六日より廿日まて日月赤き事紅の
ごとく○九月年岩伯桂江東吟芸藩滅○九月廿三日不義の法るに
付の者多へうこ作る有江戸堀くく定板建川
○九月麻布つ本松不協上る退隠の地か来る
○江戸名所記摂行　七巻浅井了意作　○市村座くりく右近源左衛門
りの狂言を興行して世不別まる
同　三　年　癸卯
正月廿二日坂後七代顕家後記十八才○五月天下不令して殉死を止めし
○六月十五日浅草不熊谷安左衛門稲荷社勧請